

Title	研究的コンテキストの顕在化
Sub Title	
Author	本間, 友(Honma, Yū)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.5, No.1 (2018. 3) ,p.36- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第7回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて : コンテキストネットワークの分散型ミュージアムへの展開 開催日時 : 2017年11月24日 (金) 14:00 ~ 17:30 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス西別館1 Comment
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Comment :

研究的コンテクストの顕在化

本間 友

(慶應義塾大学アート・センター所員・
文学部非常勤講師)

慶應義塾大学アート・センターの本間友と申します。コメントというお話なのですが、私は勘違いして、自分の報告を持ってきてしまいました。どうしようかと思いましたが、時間がないので、失礼して、元の原稿のまま報告をいたします。

美術館やアーカイブにおけるコンテクストということ考えた場合、もちろん渡部先生がお話しされていたような、ミュージアムが設定するコンテクスト、あるいは作品が暴いていく社会文化的なコンテクストの話も頭をよぎりますし、あるいは齋藤さんのおっしゃっていたような、アーカイブにおけるコンテクストもあります。私の最近の関心の一つは、また少し違った観点で、大学という場所で、資料や作品が持つ研究的なコンテクストを顕在化させていきたい、というものです。

アート・センターのアーカイブは、1998年に設置されてから20年ほど、特に日本の戦後の前衛美術に関する芸術資料に焦点をあてて活動してきました。



アート・センターが一番最初にアーカイブを設置したときのもくろみの1つとして、研究アーカイブというものをつくってみよう、といったものがありました。研究アーカイブとは、「資料が属する主題領域における現在、過去の研究へのアクセスを提供し、研究活動の拠点となる場所」とアート・センターでは考えています。そのため、アーカイブ学の方が考えている、あるいは取り組んでいらっしゃるアーカイブとは、おそらくまた少し毛色が違うものになります。

研究アーカイブ

資料が属する主題領域における現在・過去の研究へのアクセスを提供し、研究活動の拠点となる場

参照：
 斎藤洋一「ジェネティック・アーカイブ：エンジンの方法論」、『ジェネティック・アーカイブ：エンジン—デジタルの森で植える十萬葉』、慶應義塾大学アート・センターBooklet, 2000年、pp. 3-10.

前田宗士男「芸術的創作行為の再構築—『十萬葉アーカイブ』と研究アーカイブシステム」、『ぱうら色ダンス』のイコノロジー—土方興を再構築する」、慶應義塾大学アート・センター、2000年、pp. 34-45.

研究の拠点となるようなアーカイブにおいては、資料に対してどういったカタログをつくっていけばいいのか。ここでいうカタログは、DMCのカタログとは違う意味ですが、そのカタログを構成する情報として、研究来歴というものについて考えてみたいと思います。

研究来歴

アーカイヴに存在する一つ一つの資料がどのような研究において参照されてきたのか、という資料研究の歴史

研究来歴とは、少し聞き慣れない言葉で、私が勝手に使っている言葉なのですが、研究のプロビナンスで、英語では Research Provenance と呼んでいます。アーカイヴに存在する一つ一つの資料、ないしは美術館に存在する一つ一つの作品というものが、今までどういった研究において参照されてきたのかという、資料研究の歴史をさします。研究来歴の重要性は、言わずとも明らかですが、アート・センターの資料の主たる主題領域である、第二次大戦後の芸術においてはとりわけ重要です。土方巽の『バラ色ダンス』を例にあげると、公演のポスターは横尾忠則がデザインしています。この時代の芸術活動というのは、異分野間のコラボレーション、例えばデザイナーと舞踏家、音楽家と舞踏家、文学者と舞踏家といったように、さまざまな芸術領域の人々が、非常に活発なコラボレーションを行いながら、1つの作品をつくっている、そんな時代でした。



土方巽舞踏作品
バラ色ダンス
—A LA MAISON DE M. CIVECAWA
1965年
千日谷会堂（日比谷）
出演：大野一雄、笠井敏
美術：中西夏之、横尾忠則
赤瀬川謙平、加納光於



横尾忠則によるポスター（1965）

そうであるならば、作品にまつわる資料が一つあったとして、その資料に寄せられる研究関心も、例えばパフォーマンス研究の領域から、デザインの領域からだけではなく、写真の歴史や、音楽の歴史など、そういったさまざまな観点から寄せられることになります。

言い換えると、1つの資料が、非常に重層的な研究的なコンテキストの上に置かれているということが、アート・センターの資料の大きな特徴です。

研究来歴

アーカイヴに存在する一つ一つの資料がどのような研究において参照されてきたのか、という資料研究の歴史



一方で、1つの資料に対してどういった研究が今までなされてきたのかということは、実は資料の側からはとても見えにくい。例えば、研究の形で一番分かりやすい論文のようなものを考えた際に、論文の中には、こういった資料を参照している、こういったものに言及しているということが、図版や引用、参考文献などといった形で付いているわけです。しかし、当の資料の側から、どの文献に引用されたとか、ある論文に図版として入っているとかが、そういった情報はなかなか見えてきません。つまり、資料と研究の成果との関係が、研究の側からは見えるけれど、資料の側からは見えないという、ある種一方通行的な状況に置かれているということだと思います。

そのため、研究来歴を資料に対して蓄積することにより、資料と研究間の関係性を、言ってみれば再構築し、資料の持っている文化的、社会的、あるいは政治的な文脈を浮かび上がらせることはできないか、その資料を取り巻く非常に魅力的で豊かなコンテクストを立ち上がらせることはできないか、ということを考えています。

本間 友 (ほんま ゆう)

慶應義塾大学アート・センター所員・文学部非常勤講師。2006年慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学修了（修士）
専門は美術史および芸術情報の流通。